

# 琉球大学学術リポジトリ

沖縄県の中学生におけるアタッチメント・スタイル  
による批判的思考発達の差異の検討：  
山形県の中学生との比較を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2021-04-15 キーワード (Ja): 批判的思考, アタッチメント・スタイル, 自尊感情 キーワード (En): 作成者: 鹿野, 誠, 西本, 裕輝, Shikano, Makoto, Nishimoto, Hiroki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/48169">http://hdl.handle.net/20.500.12000/48169</a>

【研究論文】

沖縄県の中学生におけるアタッチメント・スタイルによる  
批判的思考発達の差異の検討

—山形県の中学生との比較を通して—

鹿野 誠<sup>1</sup>・西本 裕輝<sup>2</sup>

Examination of Differences in Critical Thinking Development by Attachment Style  
in Junior High School Students in Okinawa Prefecture  
—Through Comparison with Junior High School Students in Yamagata Prefecture—

Makoto SHIKANO<sup>1</sup>, Hiroki NISHIMOTO<sup>2</sup>

要 約

批判的思考が相手の発言に耳を傾け、証拠や論理、感情を的確に解釈すること、自分の考えに誤りや偏りがないかを振り返ることを大切にしている以上、自己観と他者観が批判的思考の発達に影響を与えている可能性が考えられる。本研究では、アタッチメント・スタイル「安定型」の中学生は、アタッチメント・スタイル「恐れ型」の中学生に比べて、批判的思考が発達しているという仮説をたてた。共分散構造分析を行った結果、沖縄県が「親密さへの接近」に有意な負の直接効果を与えていること、「親密さへの接近」が「証拠の重視と客観性」に有意な正の直接効果を与えていること、「親密さへの接近」、「証拠の重視と客観性」とともに「自尊感情」に有意な正の直接効果を与えていることが示され、仮説はおおむね支持できた。

キーワード：批判的思考、アタッチメント・スタイル、自尊感情

1. 研究の目的と背景

本研究において、沖縄県と山形県の比較を行う意義として、山形県は、沖縄県と比較した際、「離婚率が低い」、小中学生の「親子の会話が多い」、「朝食の摂取率が高い」、「規則正しい就寝・起床ができている」、中学生の「自己肯定感が高い」ことがある。沖縄県の子どもの批判的思考の発達をアタッチメント・スタイルの観点から考察する上で、2つの県の比較は、有用であると考えられる。

(1) 沖縄県の中学生を取り巻く問題

日本全国において沖縄県は、子どもが多い地域である。平成30年の沖縄県の合計特殊出生率は、全国1位（山形は28位）である（厚生労働省、2019）。しかし、沖縄県の子どもたちは、自己肯定感が低いことで知られている。文部科学省（以後、文科省）が平成31年度に実施した「全国学力・学習状況調査」の結果によると、全国最下位（山形は12位）となっている。自己肯定感とは、自尊心や自尊感情とも呼ばれ、自分自身を肯定的にとらえる感情、感覚のことである（便宜上、全国学力・学習状況調査において「自分には、よいところがあると思いますか」項目にて「当てはまる」と回答した率を、自己肯定感の肯定率とする）。

さらに、沖縄県は離婚率も高い。平成30年の沖縄県の離婚率（人口千対）は、全国1位となっている（厚生労働省、2019）。それに伴って、沖縄県はひとり親と子どもから成る世帯も多い。本調査においては、

<sup>1</sup> 琉球大学大学院教育学研究科

<sup>2</sup> 琉球大学、グローバル教育支援機構、教授

国勢調査の定義する母子世帯、父子世帯という用語を採用し、母子世帯、父子世帯を総称して「ひとり親世帯」と呼ぶこととする。平成27年の国勢調査の結果によると、沖縄県のひとり親世帯の総世帯数における構成比は全国平均と比較しても高い（沖縄県、2016）。

最後に、沖縄県は、親子関係が希薄である可能性が考えられる。離婚率が高いことや、ひとり親世帯数が多いことも影響しているかもしれないが、平成31年度の「全国学力・学習状況調査」の結果より、沖縄県は、日本全国と比較した際に、小中学生の親子間の会話が少ないこと、規則正しい就寝・起床のできている小学生が少ないこと、小中学生の朝食の摂取率が低いことが根拠としてあげられる。以上のことを根拠に、全国的に見た際に、沖縄県の親子関係が希薄なのではないかと考える。

親子の会話においては、「家の人（兄弟姉妹を除く）と学校での出来事について話をしますか」という項目に「している」と回答したの率をみると、沖縄県は、小学生中学生ともに全国47位である。親子間の会話の多さは、親子のコミュニケーションの多さでもあり、親が子どもに関心を持つことで自然と親子間の会話は増えると考えられる。つまり、親子間の会話の少なさは親子関係の希薄さを示すものであると考えられる。親子間の会話が小学校、中学校段階のみで少ないとは考えにくく、小学校入学以前から継続して親子間の会話が少なかったと考えられる。

規則正しい就寝・起床、朝食の摂取率においても全国と比較してして低く、親子関係の希薄さを示すものであると考えられる。沖縄県は、根本的な親子間の声かけが少ないのではないかと考えられる。

## (2) 沖縄県の自尊感情を高める取組と批判的思考

### ① 沖縄県の生徒の自尊感情を高める取組

沖縄県の児童生徒の自尊感情を高めるための取り組みのひとつとして、沖縄県教育委員会（以後、沖縄県教委）は、幼児児童生徒の自己肯定感を育むために、学校教育における指導の努力点として、「目的意識の高揚」を掲げている。

沖縄県教委（2019）は、「目的意識の高揚は、自ら課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力などの『生きる力』を支えるために大切であり、学校においては、幼児児童生徒に目標の達成に向けて努力することの大切さを気付かせたり、その過程を振り返ったりする活動を通して、自己肯定感や向上心を育む指導に努める必要がある」としている。批判的思考は、意識的に自分の考えを省察する過程が、特に問題解決において、「よりよい思考」に向かわせることが期待されており、先行研究（加藤・太田・松下・三井、2013）によって、批判的思考と自尊感情との間に共時的に正の相関があることも示されている。

### ② 批判的思考

楠見（2013）は、批判的思考を「第1に、証拠に基づく論理的で偏りのない思考である。第2に、自分の思考過程を意識的に吟味する省察的（リフレクティブ）で熟慮的思考である。第3に、より良い思考を行うために目標指向的な思考である」と定義している。沖縄県教委の掲げる「目的意識の高揚」、「生きる力」の育成において、「自ら課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」の獲得を目指す際、批判的思考は重要であると考えられる。

## (3) 親子関係の希薄さとアタッチメント・スタイル

### ① 親子関係の希薄さが子どもに与える影響

先に述べたように沖縄県は離婚率が全国平均と比較した際に高い。もちろん、全てのひとり親世帯がそうであるとは思わないが、李（2019）によると、ひとり親家庭の親と子どもの生活を支援するためのさまざまな政策、制度の整備が進んでいる今日でも、ひとり親家庭の親と子どもは、経済的困難、環境の変化に適応していく過程で経験する困難、教育をめぐる困難、社会的排除などの諸問題を抱えており、ひとり親家庭の親と子の多くは、これらの困難を複合的に経験しているという（先行研究では、統計調査を用いる場合に「ひとり親世帯」を使用し、親子の生活状況を示す場合や引用を用いる場合は、文脈

に沿って「ひとり親家庭」などを用いている)。ひとり親世帯であっても、親と子どもが経験する状況は様々であり、一概には言えないが、沖縄県の社会背景、離婚率が高く、ひとり親世帯が多いこと、加えて若年母子の数も多いことが、子どもに与える影響は少なくないとする。

先に述べたように、沖縄県は、日本全国と比較した際に、小中学生の親子間の会話が少ないこと、規則正しい就寝・起床のできている小学生が少ないこと、小中学生の朝食の摂取率が低いこと、教育職員の精神疾患による休職率が高いことを根拠に、親子関係が希薄であるとする。親子関係の希薄さが子どもに与える影響として、アタッチメント理論がある。Bowlby (1973) は、アタッチメント人物の利用可能性についての確信は乳幼児期から青年期という未熟な時期に徐々に形成され、特に生後6ヶ月頃から5歳くらいまでの早期のアタッチメント経験を基礎とする内的作業モデルの構成が、その後の人生にきわめて重要な意味を持つと考える。

② アタッチメント・スタイル

林 (2011) によると、アタッチメントとは「個体がある危機的状況に接し、あるいはまた、そうした危機を予知し、恐れや不安の情動が強く喚起された時に、特定の他個体への接近を通して、習慣的な安全感覚 (felt security) を回復・維持しようとする傾向」と定義される。

粕屋 (2016) によると、内的作業モデル (Internal Working Models: 以後, IWM) とは、「アタッチメント対象との具体的な体験の中で形成されたアタッチメント対象への接近可能性や、アタッチメント対象の情緒的応答性に関する表象および自分の他者への働きかけの有効性に関する表象モデルである」と定義される。

Bowlby (1973) は、内的作業モデルを「(a)愛着人物が支援や保護の求めに大体において応じる種類の人であると判断されるか」という、他者に関するモデル (以後、他者観) と、「(b)自己が他者から、特にその愛着人物から助けを与えられやすい種類の人物であると判断されるか」という、自己に関するモデル (以後、自己観) からなっているとした。その後アタッチメント・スタイルを捉えるために様々な研究が行われてきたが、有用とされているのが Bartholomew & Horowitz (1991) によって提唱された2次元・4分類モデルである (Figure 1 参照)。Bartholomew & Horowitz (1991) は、他者観を「親密さの回避」と自己観を「自尊感情の維持を他者からの受容に依存する程度」とし、それぞれの性質がポジティブかネガティブかにより異なるアタッチメントのIWMができあがり、親密性を回避するほど

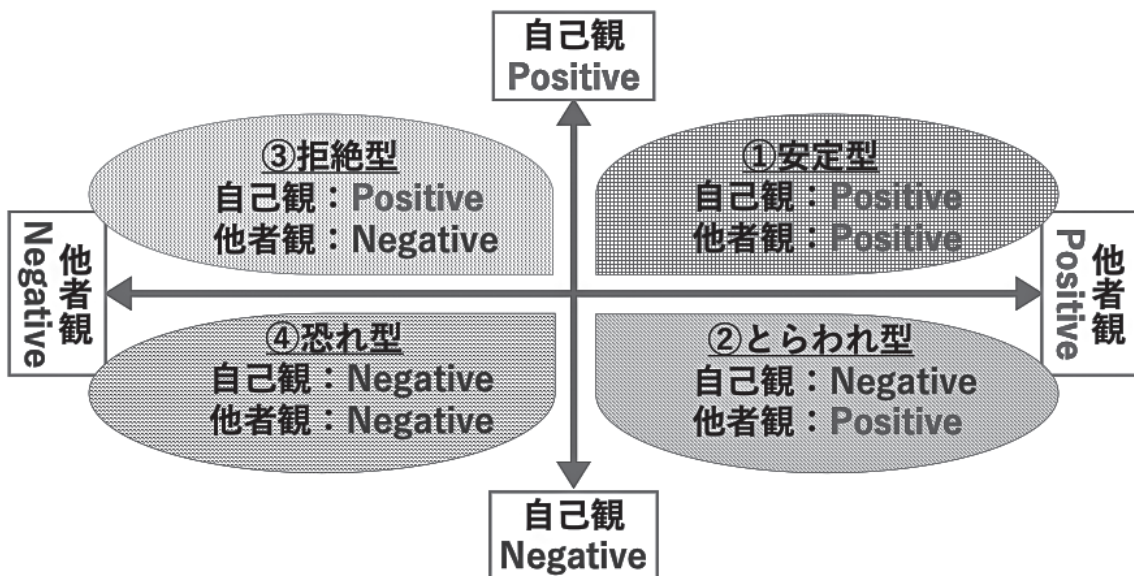


Figure 1 Bartholomew & Horowitz (1991) をもとにしたアタッチメント・スタイル4分類

他者観はネガティブ、回避しないほど他者観はポジティブ、依存性が低いほど自己観はポジティブ、依存性が高いほど自己観はネガティブとなり、4つのモデルが区分されるとした(①自己観、他者観が両方ポジティブなものを「安定型」、②自己観がポジティブで他者観がネガティブなものを「拒絶型」、③自己観がネガティブで他者観がポジティブなものを「とらわれ型」、④両方ネガティブなものを「恐れ型」)。一般化されたIWMを、一般他者に対するアタッチメント・スタイルと考えることができる(加藤, 1998)。また、先行研究(中尾・加藤, 2004)によって、自己観がネガティブであることと自尊感情との間に負の相関があることが示されている。

### ③ 批判的思考とアタッチメント・スタイルの関連

批判的思考は、教育や指導によって平等に伸ばすことができるのか、早期の、または乳幼児期から青年期という未熟な時期のアタッチメント経験を基礎とする内的作業モデルの構成において築き上げてきた経験(IWM)が批判的思考(態度)の発達に影響を与えているのではないかと考え本研究に至る。

批判的思考が、楠見(2013)の述べるように「相手の発言に耳を傾け、証拠や論理、感情を的確に解釈すること、自分の考えに誤りや偏りが無いかを振り返ることを大切にしている」以上、Bartholomew & Horowitz(1991)が述べるように、自己観がネガティブ、つまり「自尊感情の維持を他者の受容に依存する程度」が高いほど、他者に依存的つまり他者の意見を批判的に捉えることができず、また他者観がネガティブ、つまり「親密さの回避」をするほど、他者回避的つまり外部からの客観的な意見に対して拒否的であるため、批判的思考が発達しにくい可能性が考えられ、アタッチメント・スタイルによって、批判的思考の発達に差異が生じるのではないかと考える。

## (4) 研究の目的

### ① 研究の目的

沖縄県は、子どもが多い地域であり、合計特殊出生率が高い。しかし、沖縄県の子どもたちは、自己肯定感が低いことで知られている。加えて、沖縄県は離婚率が高く、それに伴うひとり親世帯が多い。自尊感情と批判的思考に共時的な正の相関が示されているため、批判的思考を高めることで自尊感情が高まることが予想される。近年注目されている批判的思考であるが、学校の授業によって高めることができるのかという点には疑問が残る。これまでの人生において築き上げてきた経験(IWM)が批判的思考の発達に影響を与えていると考えられる。本研究の結果によっては、幼児期に大部分が形成されるIWMが批判的思考の発達に影響を与えていることが示されれば、今度の批判的思考の発達を目指す取り組みのあり方を考える上で、大きな意義を持つと考える。また、批判的思考が高まらない生徒の「背景の理解」をするという点において生徒理解の一助となると考える。

以上から、本研究の目的は、沖縄県の中学生のアタッチメント・スタイルによる批判的思考の発達の差異を山形県の中学生との比較を通して調査・検討し、アタッチメント・スタイルによる批判的思考の発達の差異を理解することで、沖縄県の中学生の批判的思考を高めるとともに生徒理解の一助とすることとする。

### ② 研究の仮説

本研究の仮説は、アタッチメント・スタイル「安定型」の中学生は、アタッチメント・スタイル「恐れ型」の中学生に比べて、批判的思考が発達しているとする。

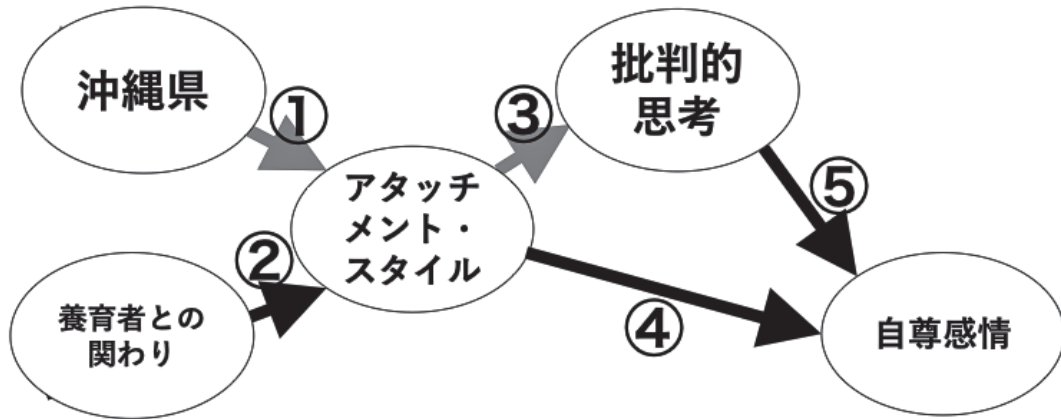


Figure 2 仮説モデルFigure

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

本調査は、山形県内の公立A中学校、沖縄県内の公立B中学校に通う生徒、計588名（男子294名、女子286名、無回答10名）（1学年194名、2学年210名、3学年186名）を対象に行った。

### (2) 調査期間

山形県内の公立A中学校で2019年9月実施し、沖縄県内の公立B中学校で2019年10月実施した。

### (3) 材料

#### ① フェイスシート

調査の目的や注意点に関する教示を記載し、調査対象者の出席番号、学年クラス、性別、生年月日、学校名、所属部活動名の記入欄を設けた。

#### ② 友人に対する感情質問紙（全25項目）

先行研究（榎本，1999）に従い、6件法で回答を求めた。本調査では、中学生への負担を考慮し、「独立（3項目）」因子、「ライバル意識（3項目）」因子、「葛藤（4項目）」因子は、先行研究の項目数のまま採用し、「信頼・安定」因子、「不安・懸念」因子は、先行研究（榎本，1999）において、各因子の因子負荷量が多い5項目を抽出し、採用した。

#### ③ 教師との関係（全5項目）

先行研究（大久保・青柳，2004）に従い、5件法で回答を求めた。

#### ④ おうちの人との関係（全5項目）

先行研究（大久保・青柳，2004）に従い、5件法で回答を求めた。本調査では、中学生に実施する際、全項目において先行研究（大久保・青柳，2004）において使用している「親」という文言を使用するよりも「おうちの人」という文言を使用する方が適していると判断し、質問内容に変化がないことを確認した上で、全項目の「親」という文言を「おうちの人」へと変更し、採用した。

#### ⑤ 批判的思考態度尺度（全18項目）

本研究では、批判的思考態度尺度（平山・楠見，2004）が、高校生以上を対象としたため、前田・新見・加藤・梅津（2010）が作成した、文言を中学生に適した文言に変更した中学生用批判的思考態度尺度を参考に、中学生に理解しやすい文言に変更し、各実施校の教員に質問項目の確認・承諾を得た後に採用した。

先行研究（平山・楠見，2004）に従い、5件法で回答を求めた。本調査では、中学生への負担を考慮し、「証拠の重視（3項目）」因子は、先行研究（前田・新見・加藤・梅津，2010）の項目をそのまま採用し、

「論理的思考への自覚」因子、「探求心」因子は、「客観性」因子は、批判的思考態度尺（平山・楠見，2004）において、各因子の因子負荷量が多い5項目を抽出し、全18項目を採用した。

#### ⑥ 児童版ECR-RS（中尾・村上・数井，2018）

先行研究（中尾・村上・数井，2018）に従い、全9項目を採用した。先行研究（中尾・村上・数井，2018）では、「不安（3項目）」因子、「回避（6項目）」因子の2つの因子（全9項目）によって構成されている。先行研究（中尾・村上・数井，2018）に従い、7件法で回答を求めた。

#### ⑦ 家族構成に関する項目

本調査では、一緒に暮らしている人による影響を検討するために、生徒自身が現在、「1. 母親」、「2. 父親」、「3. 兄」、「4. 姉」、「5. 弟」、「6. 妹」、「7. おばあちゃん」、「8. おじいちゃん」、「9. その他」（全9項目）と一緒に暮らしているかについて質問した。

#### ⑧ Rosenbergの自尊感情尺度日本語版

先行研究（櫻井，1997）に従い、全10項目を採用した。先行研究（加藤・太田・松下・三井，2014）において、中学生を対象に調査を行う際、同じくRosenberg（1965）を参考に作成された別尺度で5件法を用いていたため、本調査も先行研究（加藤・太田・松下・三井，2014）に従い、5件法で回答を求めた。

### (4) 手続き

山形県内の公立中学校、沖縄県内の公立中学校の校長先生、または副校長先生に研究内容の説明と調査依頼を行い、調査後のフィードバックを条件に調査の承諾を得た。その後、調査協力校に質問項目の文言を確認してもらい、調査日時を決定した。1学年から3学年までの各学級の担任の先生に教示文と質問紙を配布し、各学級で質問紙調査を実施した。質問紙を配布する前に、回答は統計的に処理されるため、個人が特定されることなく、研究の目的以外に使用しないことを伝えた。調査時間は、およそ15分であった。本研究の分析には、因子分析、信頼性分析、 $\chi^2$ 検定、t検定、分散分析、相関分析、重回帰分析においては、IBM SPSS Statistics 19.0を用い、共分散構造分析においては、IBM SPSS Amos Graphics 22.0を用いて分析を行った。

### (5) 調査後のフィードバック

調査後のフィードバックは、2月中旬から下旬の期間にかけて行った。フィードバックの内容は本研究の説明と調査協力校の結果、考察、そして学級ごとの個別データであった。

## 3. 結果

### (1) 尺度の検討

ここでは本格的な分析に入る前に、分析に用いる変数の検討を行っていききたい。

#### ① 友人に対する感情質問紙の検討

先行研究（榎本，1999）に従って、主因子法による因子分析を行った。5因子構造が妥当であると考え、再度主因子法バリマックス回転による因子分析を行ったところ、20項目ともに因子負荷量の絶対値が（.424～.845）を示していた。

第I因子は、「友人に対する信頼・安定」因子と命名した。第II因子は、「友人に対する不安・懸念」因子と命名した。第III因子は、「友人に対する葛藤」因子と命名した。第IV因子は、「友人に対する独立」因子と命名した。第V因子は、「友人に対するライバル意識」因子と命名した。

内的整合性の検討のため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、第I因子 $\alpha=.896$ 、第II因子 $\alpha=.855$ 、第III因子 $\alpha=.855$ 、第IV因子 $\alpha=.757$ 、第V因子 $\alpha=.728$ と十分な信頼性が得られた。

#### ② 教師との関係の検討

教師との関係の5項目に対して、最尤法による因子分析を行った。1因子構造が妥当であると考え、因子は、「教師への信頼」因子と命名した。内的整合性の検討のため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。

その結果、第 I 因子  $\alpha=.908$  と十分な信頼性が得られた。

### ③ おうちの人との関係の検討

親との関係の 5 項目に対して、最尤法による因子分析を行った。1 因子構造が妥当であると考え、因子は、「おうちの人への信頼」因子と命名した。内的整合性の検討のため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、第 I 因子  $\alpha=.928$  と十分な信頼性が得られた。

### ④ 中学生用批判的思考態度尺度の検討

批判的思考態度尺度の 18 項目に対して、先行研究（平山・楠見，2004）に従って、主因子法による因子分析を行った。4 因子構造が妥当であると考え、再度主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。1 つの項目に .45 以上負荷してる項目、すなわち因子負荷量の絶対値が .45 以上の項目を、各因子を構成する項目として採用し、因子負荷量の絶対値が .45 以上の項目を持たない第 IV 因子を除外し、第 I 因子、第 II 因子、第 III 因子を採用し、解釈を行った。

第 I 因子は、「探求心」因子と命名した。第 II 因子は、「証拠の重視と客観性」因子と命名した。第 III 因子は、「論理的思考への自覚」因子と命名した。

内的整合性の検討のため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、第 I 因子  $\alpha=.755$ 、第 II 因子  $\alpha=.822$ 、第 III 因子  $\alpha=.827$  と十分な信頼性が得られた。

### ⑤ 児童版 ECR-RS の検討

児童版 ECR-RS の 9 項目に対して、最尤法による因子分析を行った。2 因子構造が妥当であると考え、因子負荷量の絶対値が .40 に満たない項目 1 つを削除し、再度最尤法バリマックス回転による因子分析を行った。1 つの項目に .45 以上負荷してる項目、すなわち因子負荷量の絶対値が .45 以上の項目を、各因子を構成する項目として採用し、因子の解釈を行った。第 I 因子は、「親密さへの接近」因子と命名した。第 II 因子は、「見捨てられ不安」因子と命名した。

内的整合性の検討のため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、第 I 因子  $\alpha=.884$ 、第 II 因子  $\alpha=.865$  と十分な信頼性が得られた。

### ⑥ 自尊感情尺度の検討

自尊感情尺度の 10 項目に対して、先行研究（櫻井，1997）に従って、主因子法による因子分析を行った。1 因子構造が妥当であると考え、因子負荷量の絶対値が .40 に満たない項目 1 つを削除し、再度主因子法による因子分析を行ったところ、9 項目ともに因子負荷量の絶対値が (.510～.698) を示していた。1 つの項目に .45 以上負荷してる項目、すなわち因子負荷量の絶対値が .45 以上の項目を採用し、解釈を行った。

因子は、「自尊感情」因子と命名した。内的整合性の検討のため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、第 I 因子  $\alpha=.788$  と十分な信頼性が得られた。

## (2) モデルの立証

本研究では、共分散構造分析を行う。共分散構造分析は、本研究の仮設モデルを立証する上で必要な分析であると考え、アタッチメント・スタイルを規定する「親密さへの接近」因子、「見捨てられ不安」因子の 2 つの因子と各変数との関係性を検討するために、「親密さの回避」因子を用いたモデルと「見捨てられ不安」因子を用いたモデルの 2 つのモデルを作成した (Figure 3, Figure 4 参照)。

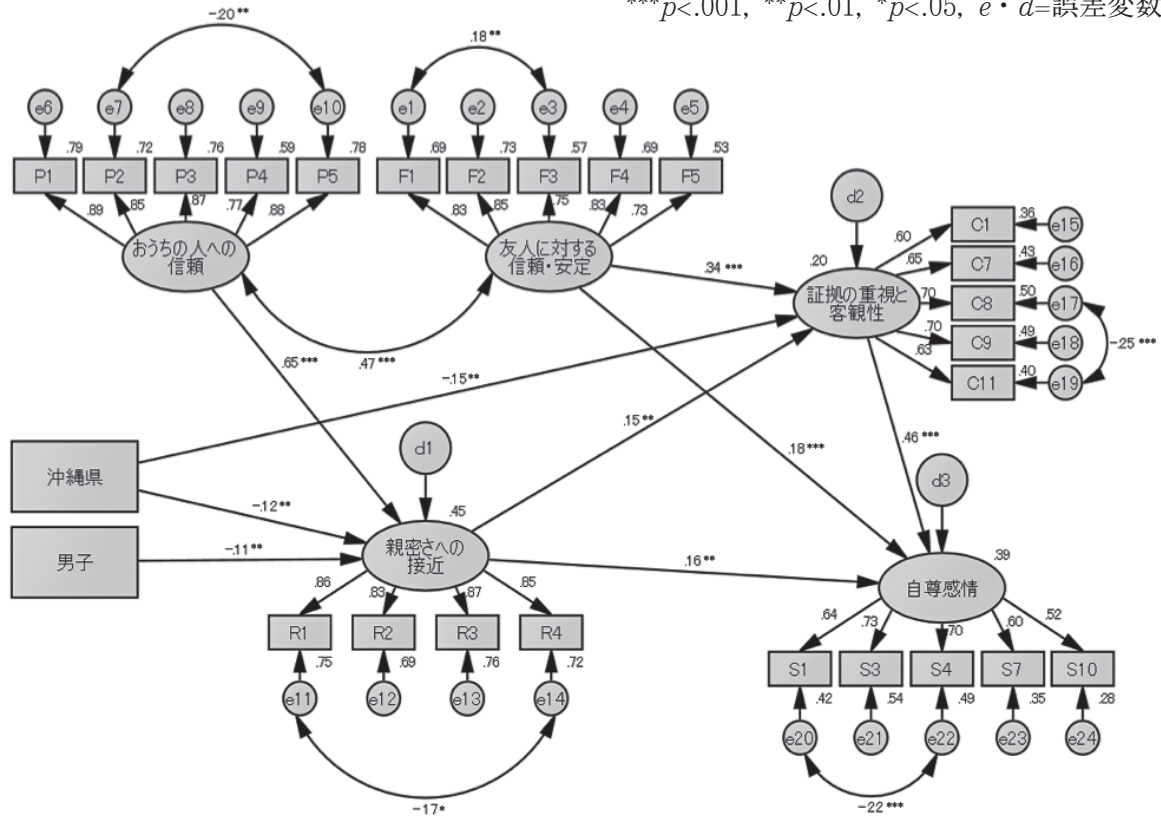
### ① 「親密さへの接近」因子を用いた共分散構造モデリング

「親密さへの接近」因子を用いたモデルでは、「友人に対する信頼・安定」因子、「おうちの人への信頼」因子、「親密さへの接近」、「証拠の重視と客観性」因子、「自尊感情」因子、ダミー変数として性別（女子を 0、男子を 1）、出身地（山形県を 0、沖縄県を 1）を用いた。モデルの適合度を算出するため、使用変数に欠損値を含むサンプルを除外し、496 名を対象に実施した。

結果は、「親密さへの接近」因子に、男子 ( $\beta=-.105$ ,  $p<.01$ )、沖縄県 ( $\beta=-.119$ ,  $p<.01$ )、「おうちの人への信頼」因子 ( $\beta=.645$ ,  $p<.001$ ) から正または負の直接効果があり、「証拠の重視と客観性」因



\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ ,  $e \cdot d$  = 誤差変数



( $GFI=.923$ ,  $AGFI=.905$ ,  $CFI=.963$ ,  $RMSEA=.042$ )

Figure 3 「親密さへの接近」因子を用いた共分散構造モデリング

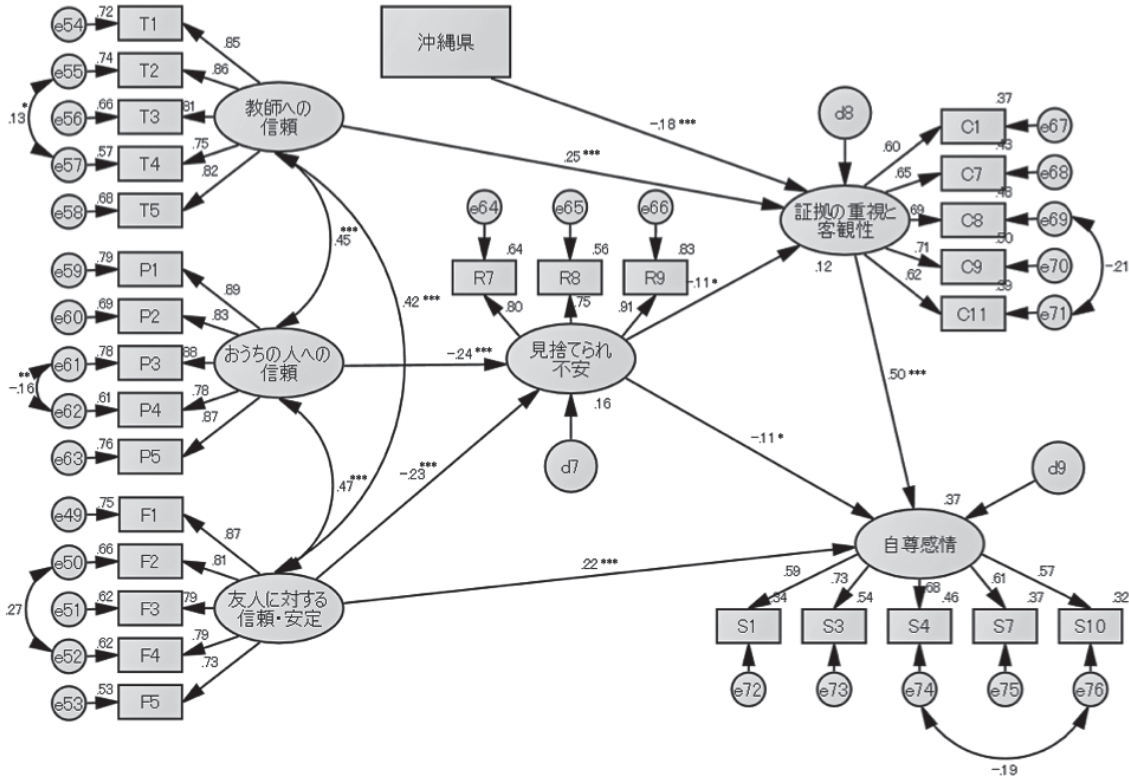
子に沖縄県 ( $\beta = -.148$ ,  $p < .01$ ), 「友人に対する信頼・安定」 ( $\beta = .342$ ,  $p < .001$ ), 「親密さへの接近」 ( $\beta = .151$ ,  $p < .01$ ) から正または負の直接効果があり, 「自尊感情」因子に「親密さへの接近」 ( $\beta = .158$ ,  $p < .01$ ), 「証拠の重視と客観性」 ( $\beta = .459$ ,  $p < .001$ ) から正または負の影響があることが確認された。また, 「証拠の重視と客観性」因子に男子 ( $\beta = -.016$ ), 沖縄県 ( $\beta = -.018$ ), 「おうちの人への信頼」 ( $\beta = .099$ ) から正または負の間接効果があり, 「自尊感情」因子に男子 ( $\beta = -.024$ ), 沖縄 ( $\beta = -.095$ ), 「友人に対する信頼・安定」 ( $\beta = .157$ ), 「おうちの人への信頼」 ( $\beta = .149$ ), 「親密さへの接近」 ( $\beta = .069$ ) から正または負の影響があることが確認された。分析過程において, 「教師への信頼」因子は有意な値を得られなかったため除外した。適合度は,  $GFI$ ,  $AGFI$ ,  $CFI$ ,  $RMSEA$ を採用し, 十分な値 ( $GFI=.923$ ,  $AGFI=.905$ ,  $CFI=.963$ ,  $RMSEA=.042$ ) が得られたため, モデルを採用した (Figure 3 参照, Figure中の誤差変数から尺度項目, 潜在変数から尺度項目へのパスの標準化係数は, 全て0.1%水準で有意であったため有意確率の表記を省略した)。

## ② 「見捨てられ不安」因子を用いた共分散構造モデリング

「見捨てられ不安」因子を用いたモデルでは, 「友人に対する信頼・安定」因子, 「おうちの人への信頼」因子, 「教師への信頼」因子, 「見捨てられ不安」因子, 「証拠の重視と客観性」因子, 「自尊感情」因子, ダミー変数として性別 (女子を0, 男子を1), 出身地 (山形県を0, 沖縄県を1) を用いた。モデルの適合度を算出するため, 使用変数に欠損値を含むサンプルを除外し, 498名を対象に実施した。

結果は, 「見捨てられ不安」因子に, 「友人に対する信頼・安定」因子 ( $\beta = -.233$ ,  $p < .001$ ), 「おうちの人への信頼」因子 ( $\beta = -.237$ ,  $p < .001$ ) から負の直接効果があり, 「証拠の重視と客観性」因子に沖縄県 ( $\beta = -.180$ ,  $p < .001$ ), 「教師への信頼」因子 ( $\beta = .247$ ,  $p < .001$ ), 「見捨てられ不安」 ( $\beta = -.109$ ,  $p < .05$ ) から正または負の直接効果があり, 「自尊感情」因子に「友人に対する信頼・安定」因子 ( $\beta$

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ ,  $e \cdot d =$  誤差変数



( $GFI=.909$ ,  $AGFI=.890$ ,  $CFI=.953$ ,  $RMSEA=.045$ )

Figure 4 「見捨てられ不安」因子を用いた共分散構造モデリング

$=.217$ ,  $p < .001$ ), 「見捨てられ不安」 ( $\beta = -.109$ ,  $p < .05$ ), 「証拠の重視と客観性」 ( $\beta = .498$ ,  $p < .001$ ) から正または負の影響があることが確認された。また, 「証拠の重視と客観性」因子に「友人に対する信頼・安定」因子 ( $\beta = .025$ ), 「おうちの人への信頼」因子 ( $\beta = .026$ ) から正の間接効果があり, 「自尊感情」因子に沖縄県 ( $\beta = -.090$ ), 「友人に対する信頼・安定」 ( $\beta = .038$ ), 「教師への信頼」因子 ( $\beta = .123$ ), 「おうちの人への信頼」 ( $\beta = .039$ ), 「見捨てられ不安」 ( $\beta = -.054$ ) から正または負の影響があることが確認された。適合度は,  $GFI$ ,  $AGFI$ ,  $CFI$ ,  $RMSEA$ を採用し, 十分な値 ( $GFI=.909$ ,  $AGFI=.890$ ,  $CFI=.953$ ,  $RMSEA=.045$ ) が得られたため, モデルを採用した (Figure 4 参照, 図中の誤差変数から尺度項目, 潜在変数から尺度項目へのパスの標準化係数は, 全て0.1%水準で有意であったため有意確率の表記を省略した)。

### (3) 相関関係について

因果確認の結果, 「証拠の重視と客観性」因子は互いに影響しあっていることが示されたため, 再度「証拠の重視と客観性」因子と「自尊感情」因子のみを用いて, 共分散構造分析による相関の確認を行った。モデルの適合度を算出するため, 使用変数に欠損値を含むサンプルを除外し, 534名を対象に実施した。

結果は, 「証拠の重視と客観性」因子と「自尊感情」因子との間 ( $r = .60$ ,  $p < .001$ ) に0.1%水準で有意な正の相関があることが確認された。適合度は,  $GFI$ ,  $AGFI$ ,  $CFI$ ,  $RMSEA$ を採用し, 十分な値 ( $GFI=.965$ ,  $AGFI=.943$ ,  $CFI=.950$ ,  $RMSEA=.062$ ) が得られたため, モデルを採用した。

## 4. 考察

### (1) 仮説・仮説モデルの立証

本研究では, 共分散構造分析を用いて, 仮説モデルの立証を行った。結果は, 仮説・仮説モデルをお

おむね支持できた。しかし、一方で、想定した要因以外でも各因子に影響を与える要因が確認された。沖縄県出身であることは、想定された「親密さへの接近」因子のみではなく、「証拠の重視と客観性」因子に直接負の影響を与えていること、当初想定していなかった男子であるという性別要因が「親密さへの接近」因子に負の影響を与えていること、「友人に対する信頼・安定」因子が「見捨てられ不安」因子に直接負の影響、「証拠の重視と客観性」因子、「自尊感情」因子に直接正の影響を与えていること、「教師への信頼」因子が「証拠の重視と客観性」因子に直接正の影響を与えていることが確認された。

つまり、アタッチメント・スタイルの形成には、沖縄県の要因、「おうちの人への信頼」因子以外にも、性別要因、「友人に対する信頼・安定」因子が影響していること、「証拠の重視と客観性」因子には、アタッチメント・スタイルによる要因の他にさらに沖縄県の要因と「教師への信頼」因子が影響していること、「自尊感情」因子には、アタッチメント・スタイルによる要因と「証拠の重視と客観性」因子の他に、「友人に対する信頼・安定」因子が影響していることが確認された。また、先行研究（加藤・太田・松下・三井，2013）において、批判的思考態度尺度の各因子と自尊感情との間に共時的に正の相関が確認されているため、本研究においても、相関関係を検討した結果、共分散構造分析において「証拠の重視と客観性」因子と「自尊感情」因子の正の相関関係を確認され、先行研究（加藤・太田・松下・三井，2013）の結果とも一致した。つまり、「証拠の重視と客観性」因子と「自尊感情」因子は一方向の因果関係ではなく、相関関係にあり、どちらかの向上が双方の向上につながると言える。

## (2) 研究結果から得られた学校現場への示唆

本研究の最大の意義は、アタッチメント・スタイルと批判的思考の関係を明らかにしたことであるといえる。教育現場において、批判的思考が育ちにくい、様々な情報を鵜呑みにしてしまいやすい、客観性や他者視点を持っていない、自分の考えを省みていない生徒がいた場合、授業づくりを改善し、授業形式を工夫することや生徒自身にアプローチすることも重要なことであると思われる。しかし、生徒の抱える人間関係、友人との関わり方や家庭環境、親や養育者との信頼関係に何かしらの問題がないかと生徒の背景にアプローチすることも重要であることが本研究を通して示された。

教師がいくら資料やデータによって客観的な証拠を示したとしても、心理的な要因によって既存の知識を更新することや、逆にどれだけいいかげんな証拠や根拠に乏しい情報であっても、情報を取捨選択できない生徒は、授業の改善や授業形式の工夫によって批判的思考を高めることは難しいと考えられる。

また、批判的思考を高める要因として教師への信頼も重要であることが示された。教師は日頃から生徒との信頼関係を作ることが、生徒の批判的思考を育むために必要なことであるといえる。「教師への信頼」因子の項目を改めてみると「学校の先生は生徒の気持ちをわかってくれる」などの項目で構成されている。教師が生徒への理解を示すこと、なんでも受け止めてくれるという安心感が、生徒たちの客観性、証拠の重視、他者の意見を尊重することや、内省、論理的思考、探求心、学習意欲等の高まりにつながっている可能性が考えられる。

## (3) 本研究において今後の改善点

本研究では、沖縄県の出生率が高いこと、沖縄県の離婚率が高いこと、それに伴うひとり親世帯が多いこと、親子関係の希薄さに注目し、原因を求めたが、本研究でアタッチメント・スタイルの形成とひとり親世帯との関係、兄弟姉妹がいることがアタッチメント・スタイルの形成にどのような影響をもたらすのかを明らかにすることはできなかった。本研究の改善点としては、ひとり親世帯や一人っ子の中学生のサンプルを増やすことが挙げられ、より出身地の違いが何によるものなのかを掘り下げて調査する必要があると考える。本研究では、ひとり親世帯、一人っ子の中学生のサンプルが少なく、完全にひとり親世帯、または一人っ子であることがアタッチメント・スタイルと関係していないとは言い切れず、一部「探求心」については、ひとり親世帯であることで高まる可能性が示された。家族構成とアタッチメント・スタイルの形成の関係の解明には、さらなる研究が必要であると言える。今後、本研究によ

て示された出身地による違いの要因が明らかになれば、より効果的な支援につながると考えられる。

## 謝辞

本研究を始めるにあたって、多くの皆様に御協力を頂きました。本研究にご協力して頂いた全ての方に心より感謝申し上げます。本研究は、私たちだけでは決して成し遂げることができない研究であり、多くの人の御協力や支えがあったからこそ、最後まで遂げることができました。

本研究を行うにあたり、御協力を賜った皆様に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞とかえさせていただきます。本当にありがとうございました。

## 引用文献

- Bartholomew, K. and Horowitz, L. M., 1991, "Attachment Styles Among Young Adults.: A Test of a Four-Category Model", *Journal of Personality and Social Psychology*, 61 (2): 226-244.
- Bowlby, J., 1963, *Attachment and Loss. Vol.1.: Separation*, London: Hogarth press. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子, trans., 1976, *母子関係の理論 I 母子関係の理論*, 東京: 岩崎学術出版社.)
- 榎本敦子, 1999, 「青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化」『教育心理学研究』47, 180-190.
- 林もも子, 2010, 『思春期のアタッチメント』みすず書房.
- 平山るみ・楠見孝, 2004, 「批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いての検討—」『教育心理学研究』52, 186-198.
- 粕谷貴志, 2016, 「中学生の内的作業モデルの変化と学適応感との関連」『Japanese Journal of Applied Psychology』41 (3), 299-307.
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里, 2013, 「中学生の自尊心を低下させる要因についての研究—批判的思考の発達との関連から—」『静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇)』63, 135-143.
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里, 2014, 「思春期における思考の発達と自己および人間関係への影響—批判的思考態度について縦断調査をもとに—」『子ども発達臨床研究』5, 21-30.
- 加藤和生, 1998, 「Bartholomewらの4分類愛着スタイル尺度 (RQ) の日本語版の作成」『Journal of Cognitive Processes and Experiencing』7, 41-50.
- 楠見孝, 2013, 「良き市民のための批判的思考」『心理学ワールド』61, 5-8.
- 前田健一・親見直子・加藤寿朗・梅津正美, 2010, 「中学生の批判的思考力と社会的事象に対する関心・意欲および社会態度」『広島大学心理学研究』10, 89-100.
- 中尾達馬・加藤和生, 2004, 「成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み」『Japanese Journal of Psychology』75 (2), 154-159.
- 中尾達馬・村上達也・数井みゆき, 2018, 「児童期においてアタッチメント不安とアタッチメント回避を測定する試み—児童番ECR-RSの日本語版作成—」『パーソナリティ研究』27 (3), 179-189.
- 大久保智生・青柳肇, 2004, 「中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『日本福祉教育専門学校研究紀要』12, 9-15.
- 沖縄県教育委員会, 2019, 「改訂版学校教育における指導の努力点」.
- 李環媛, 2019, 「配偶者の離死別と子どもの生活状況」『社会保障研究』4 (1), 4-19.
- 櫻井茂男, 1997, 「現代に生きる若者たちの心理—嗜癖・性格・動機づけ—」風間書房.